宇野千代作品

顕著な地元との関わり

顕彰会とNPO「風の音」を読み解く

岩国市出身の作家・宇野千代（1897～1996年）が遺した作品の中でも郷里・岩国の地名が数多く登場し、千代の父親とみられる人物をモチーフにするなど、地元との関係性が顕著な小説「風の音」の読書感想会が2日、麻里布町1丁目の私設ギャラリー「繪悠館（かいゆうかん）」で行われた。

読書感想会は文学的な側面から千代についてさらに深く知りたいと、千代の作品を顕彰している宇野千代顕彰会（島津教恵会長）と市の委託を受けて同市川西の宇野千代生家の開放事業を担っているNPO法人・宇野千代生家（西村宏理事長）が合同事業として今年6月から始めた。前回は千代の「色ざんげ」をテーマとした。

「風の音」は昭和44年に発表された。掲載された文芸総合誌「海」（中央公論社）には三島由紀夫、井上靖、椎名麟三、石川淳、平林たい子、辻邦生ら屈指の著名作家の作品が揃い、文学界における千代の地位がうかがえる。

千代の名作「おはん」も岩国を思わせる地名や店、人物などが登場するが、「風の音」はそれ以上に郷里の色合いが強い。舞台背景は明治初期。岩国出身の文芸評論家・河上徹太郎は「風の音」について「われらの郷里はおよそ武骨な貧乏城下町であるが、艶っぽさと共に男の執念や翳（かげ）、独自のひたむきな情が脈打ち、書割も方言も、より岩国的だ。その才筆により、この無粋な町が忽然と色っぽい地方都市と化したことはほとんど一文学的奇跡である」と評した。

読書会は島津さんのリードで進められ、「改めて読んで多くの新発見があった。宇野さんは晩年、中村天風さんの精神講話に影響を受けたが、この作品も、負をプラスに転じていく考え方が反映されているのではないか」、「主人公は夫に支配されているようだが、そうではないと感じさせる気高さがある」、「しっとりとした一人語りの文体が印象的だった」、「宇野さん自身の家族関係、特に父親との関わりを投影しているようだ。だが、そこには憎しみではなく奥深いところに理解を愛情がある」などと意見を交わした。次回（来年2月）は宇野千代作品の「おはん」をテーマに読書会を続ける。

「繪悠館」で開かれた宇野千代作品の読書会